

# 自由の羽翼

— 煙洲会五百回記念 —

# 自由の羽翼

—  
煙洲会五百回記念  
—

題字

竹内秀雄  
先生



煙洲会代表 菅 要 助 氏

本肖像画は煙洲会500回記念として会員より菅代表に贈呈されたもので、原画は春陽会田辺謙輔画伯（昭和7年建築卒）の油絵8号の力作であります。（昭和60年8月）



# 序 文

煙洲会代表 菅 要 助

(大正十三年横浜高工電化第二回卒)

『巨星落ち 行くては暗し 秋の道』

昭和三十六年八月二十九日、煙洲先生の御逝去の際の一門下生としての私の心境であります。

『名教院釋自然居士』——煙洲先生が自ら御定めになられたもので、全く相応しい御名前であると思います。

煙洲会は先生が校長を退官された後、昭和十四年六月、川崎に先生を迎えてお話を伺ったのが最初で、終戦時及び先生の御健康が勝れなかった時、一時中止した他は空襲中にも物資不足の時も続け、昭和三十六年六月までに、二百十九回にわたって行いました。集る者は卒業生であれば誰れでもよく、御話は時局のこと、歴史のこと、教育のこと、学校経営の裏話、先生の旧友の懐旧談等多岐にわたって私達の心のより処であり、又行くべき道をお示し頂いたのであります。

時には会員中で困ったことを相談し、明快な進路をお示し頂きました。その話の中で、先生の交友の広さ記憶力の正確さに驚いたものであります。先生は海外でも生活され非常に進歩的な考

えであると同時に保守的な一面もあり、特に戦後日本を忘れた進歩的と称する日本人を最も嫌わ  
れていたようです。

煙洲先生はこの煙洲会を非常に喜んで居られ、又随分と楽しみにして居られ、「わしが長生き  
できたのは全く煙洲会のおかげだ。」とまで言われたものです。

又「私は今日最早や八十歳の頽齡である、たとえ長命であるとしても間もなく老衰して手足も  
不自由で集会には出られなくなるであろう。その様な節にも、煙洲会の同人諸君は十数年来育て  
上げた伝統を捨てず、相変らず時々でも会合して、お互の親睦を重ね人生を楽しむ一つの機関と  
して存続せしめては如何なものであらうと私は提案したのである。」とも言われました。

先生御逝去後も多くの会員の要望により、煙洲会を継続開催して先生の高遠な御思想を後世に  
受けつぐ努力を重ねて、昭和六十年五月を以て遂に五百回という輝かしい記録を迎えました。恐  
らく他に類例の無いことでありましょう。

先生は京都同志社に学び、東京帝大を卒えられ、仙台二高、広島高師、東京高工（通称蔵前高  
工）等に教鞭をとられる間に、或は新島先生、或は手島先生を始め幾多の諸先輩に接せられて、  
先生の天与の人格に増々磨きがかけられ、その光を増すに至ったものと思います。特に先生が初  
代校長として横浜高等工業学校に赴任されますやその卓越せる教育方針と非凡な学校経営の手腕  
とが忽ちにして斯界に頭角を現わし、横浜高工の名声を高からしむるに至りました。

先生は我々学生教育指導には特に意を用いられ、或は毎週一回の学生との面会日の設定、或は全校学生に対する講演、又夏期休暇中に全学生に校長先生よりの御手紙等、常に学生の中に在って、その人格の陶冶に心を尽くしていました。特に名教自然の四文字に結集された先生の教育方針は我々母校卒業生の終生の処世訓であり座右銘でもあります。

先生は学内ばかりでなく、横浜市及び市民に対する愛情の深さも亦格別のもので、古くは関東大震災後の母校名古屋市への移転問題、商工実習学校、横浜工業専修学校の創立、建築、造船、航空学科の増設、工業懇話会の主催、毎年の学校創立記念祭、高工高商の野球其他運動の定期戦、或は戦争中の必勝懇談会に老軀をかつての御活躍等学生と市民との親愛な接触と、市民の工業立国への啓蒙は横浜市民の胸にも永く残って居ることでしょう。そして、退官後も一切の公職に就かず、常に学校と卒業生の将来を暖かいまなざしで見守って下さいました。

先生は我々に対して、「人まねをするな」又「出処進退を明かにせよ。」と教えられ、特に自ら後継者としてお選びになられた富山先生に後事を託して校長をおやめになられる際は惜別の哀愁の為、涙にむせぶ満場の学生に、

『疾きこと風の如く、静かなること林の如し。』

の成句を以て別れの言葉として、自ら出処進退を明かにされました。

私は大正十年に母校入学した時以来昭和三十六年先生が御他界されるまで煙洲会其他を通じて

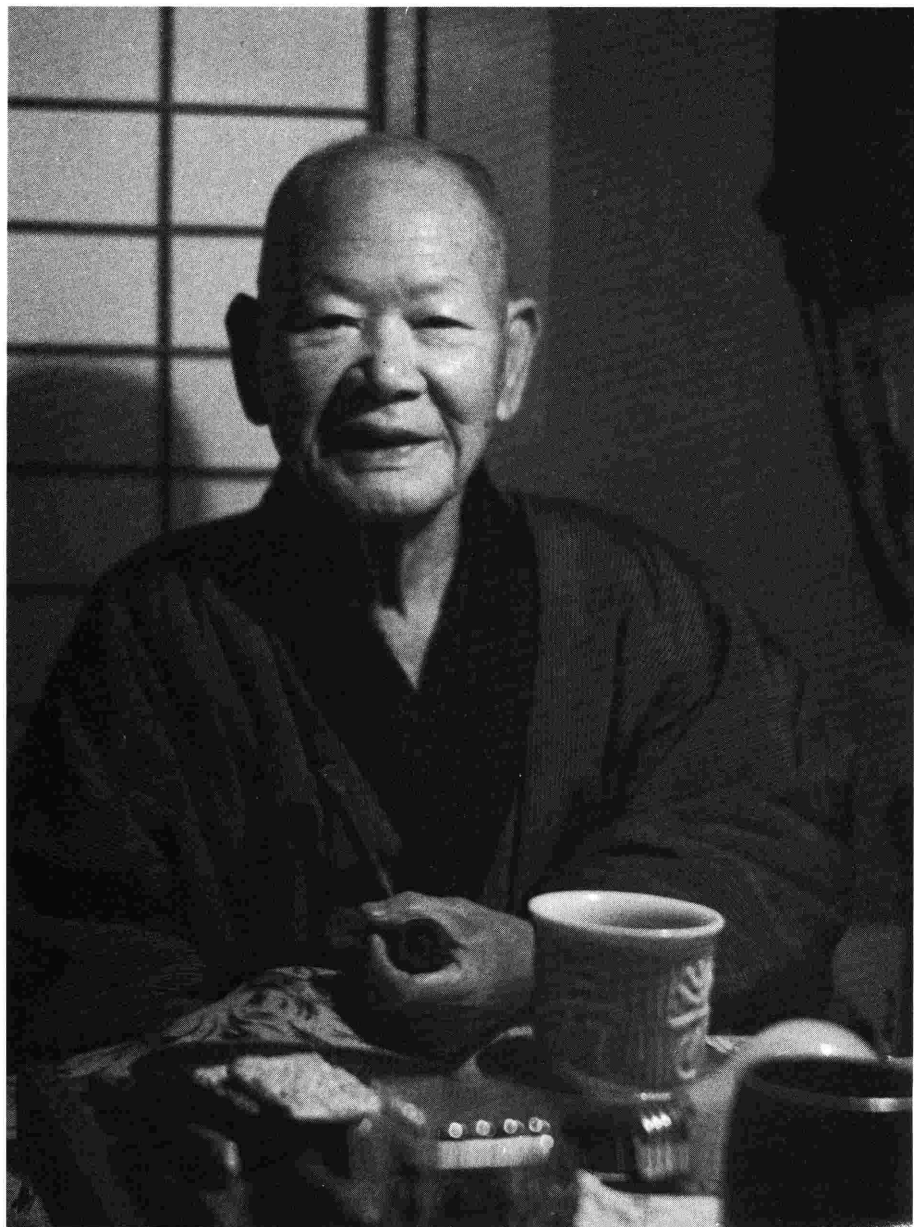
直接御指導を頂きましたが、其後も更に煙洲会の五百回を超えるという長い間、六十五年の煙洲先生の教えを受けている幸福者であります。永久に煙洲思想を受けついで此の会の継続を祈って止みません。

煙洲会五百回記念誌を発行するに際し、題名を『自由の翼』と致しました。此は横浜高等工業学校校長時代の十五年間は最も先生が「自由の翼のせとこそ」という校歌の一節を自ら思いのまゝに実行された時代であつたし、又先生も学生諸君に最も此の言葉通りの活躍をご期待されて居られた事であらうと考えたからであります。

本書が煙洲会の輝かしい五百回記念の祝賀だけでなく、煙洲先生の偉大さ、その教育理念のすばらしさを校友の方々のみならず、広く一般江湖の方々にもお知らせすることが出来れば、煙洲会同人の非常な喜びとするところであります。

終りに本書出版に際し、特に多大の労をとられた歴代の煙洲会幹事の諸氏に深甚なる謝意を表します。

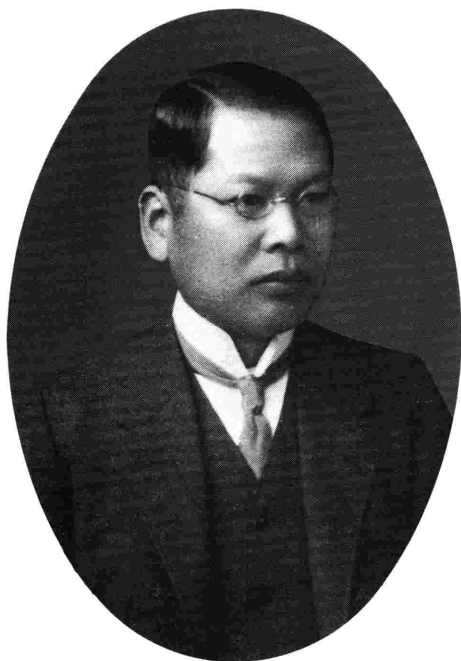




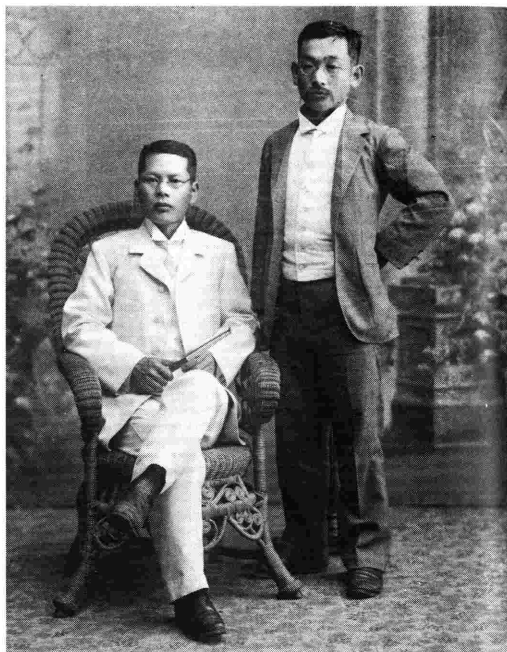
ご自宅にて 昭和30年



旧弘明寺本校舎前の名教碑



明治45年 蔵前の東京高工教授時代



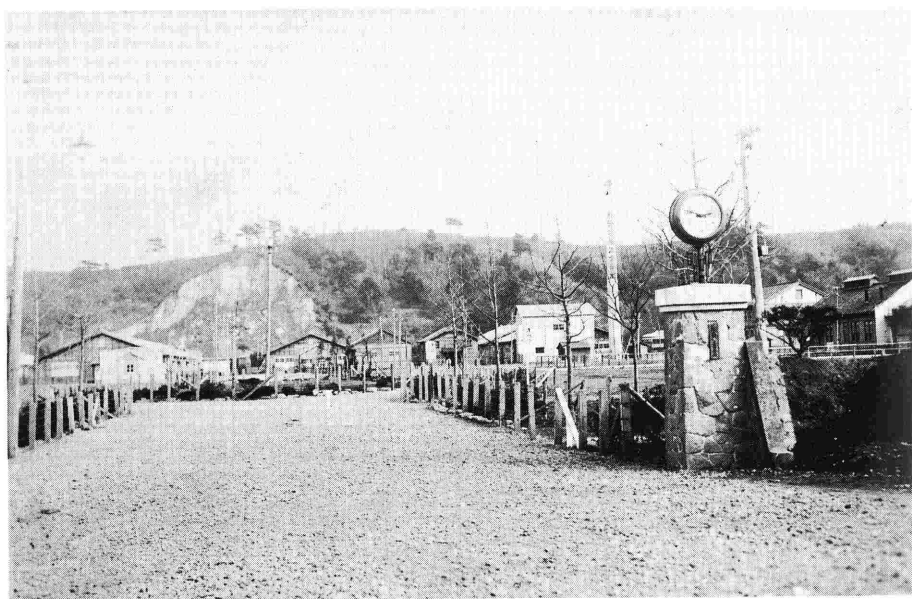
明治38年7月5日 仙台辞任退去の日薬学士佐野  
崑代作君と



明治32年9月11日 熊本にて結婚当時

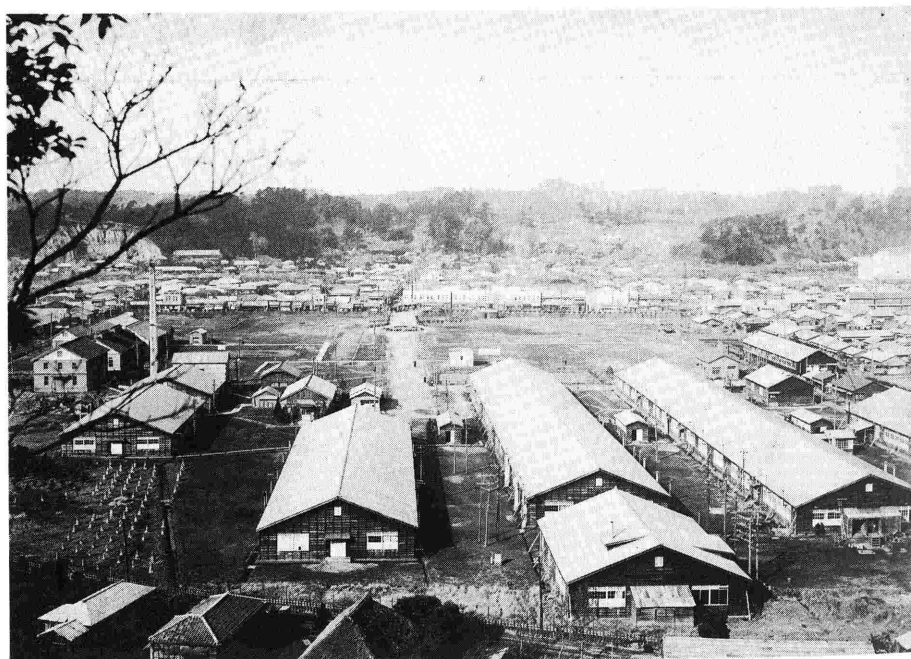


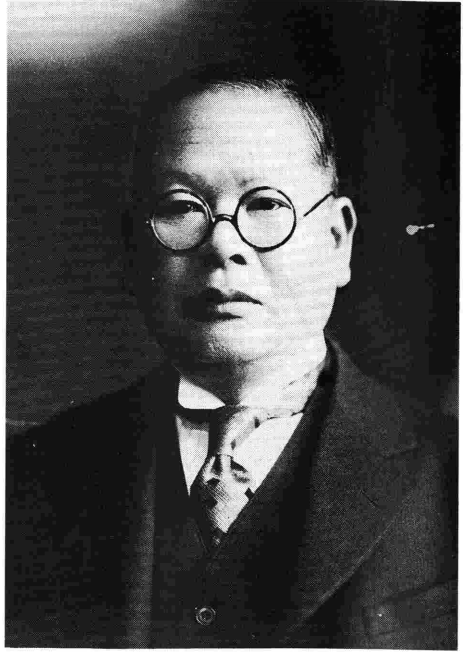
昭和3年 今上天皇御即位の時



関東大震災後のバラック校舎 昭和3年頃

上 正門より  
下 校内より





昭和4年



昭和17年 入愚亭独嘯出版に際して





六ッ川東郷神社前にて 昭和13年



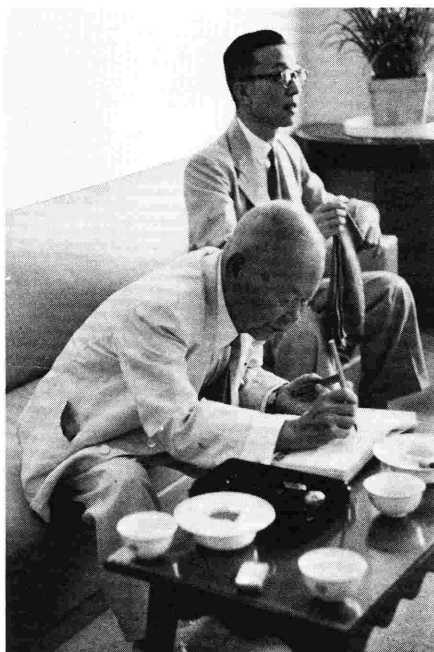
昭和16年12月8日 太平洋戦争開戦の夜



昭和27年11月 国大記念祭にて（大学内にて）



昭和33年 ご自宅前庭にて



煙洲先生86歳誕生日祝  
昭和31年9月11日 ホテル・ニューグランド



昭和31年8月 六郷会にて

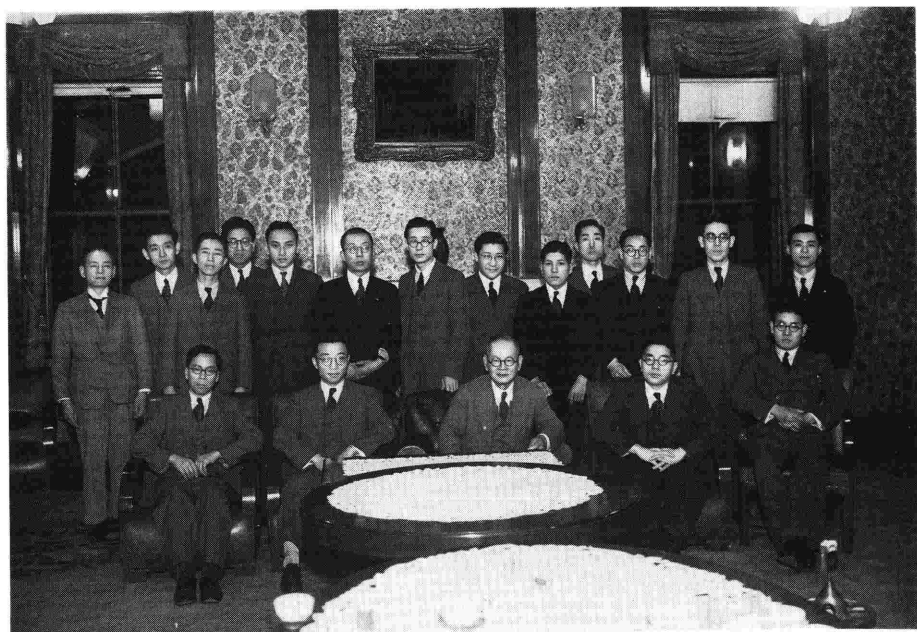


第190回煙洲会 昭和34年 1 月30日

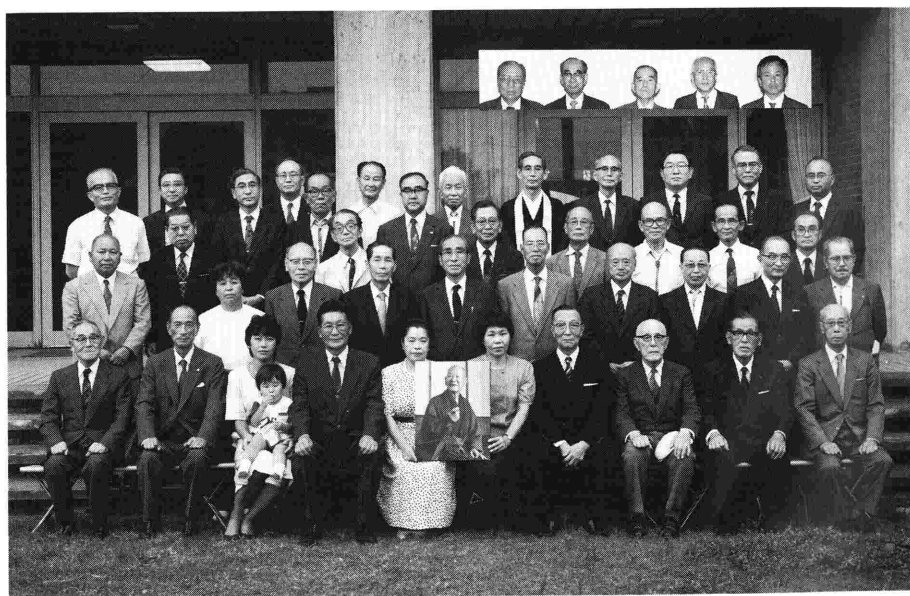


第183回煙洲会 昭和33年 6 月25日





第18回煙洲会 昭和16年 6 月26日（横浜銀行集会所）



第491回煙洲会墓参記念 昭和59年 8 月29日（弘明寺国際交流会館前）



# 目次

序文……煙洲会代表 菅 要助

口絵……思い出の煙洲先生

折込……煙洲先生ご使用の印鑑・雅号印一覽

## 煙洲先生の講話口述および外部記事よりの抜萃編

自由教育の片鱗……………1

自由教育の外輪 2 無試験無採点主義 8

無罰無賞主義 12 名教は自然なり 15

三体一心教育 19 職業教育と自由教育 21

文化と芸術 25 創作力の潜在 29

国家的目標 33 指導的精神 37

一君万民主義 40 非常時日本 44

青年教育と国防 50 工業の実際と学理 52

海外発展の旗幟 53 互助精神の發揮 54

名教自然と雅号由来（入愚亭独嘯より）……………56

病床閑話 私と煙草（入愚亭独嘯より）……………62

一、煙洲会会員による記念文集編

父母の思出（横浜高工時報　六ッ川夜話より）	80
別れの言葉（入愚亭独嘯より）	84
教育界の巨人　鈴木煙洲先生（蘇峰会機関誌「民友」の記事より）	92
無試験・無賞罰の名物校長―鈴木達治―	
（発明協会月刊誌「発明」技術者と経営6より）	97
名教自然と蒙古天然曹達の探險	
―日本のソーダ工業百年こぼれ話ハその一Ⅴ―	
（応化昭十三年杉野利之著　ソーダと塩素ハ一九八三年七号Ⅴより）	111
名教自然の原点を探る	名譽教授　竹内　秀雄
鈴木煙洲翁の思い出	元　教授　山田　嘉久
思い出づるままに	元　教授　竹内強一郎
処世の恩師	元　教授　小山　亮清
名教自然碑の常盤台工学部中央への移転秘話	学　長　横山　亨
米国の占領政策をくつがえした笑顔	機械大正十三年　鳥谷　寅雄
自由啓発	電化大正十三年　石井欣之助
	158
	149
	140
	137
	135
	132
	129

戦時中の煙洲会―遺稿―	.....	応化大正十五年	平田	義雄	166
煙洲先生の想い出	.....	機械大正十五年	荒牧	寅雄	169
煙洲先生へのおねだりのアレコレ	.....	応化大正十五年	山口	辰男	171
煙洲先生と横浜高工弓道部	.....	建築昭三年	矢崎	忠実	177
思ひ出は千々に遠くまた近く	.....	建築昭三年	網戸	武夫	181
鈴木達治煙洲先生の思ひ出	.....	電化昭四年	西尾	清治	184
楽しかった学園生活の思ひ出	.....	応化昭五年	秦	克夫	186
雅号のエピソード	.....	応化昭六年	望月	藤三	195
先生と学生運動	.....	建築昭七年	田辺	謙輔	200
名教自然碑について	.....	建築昭七年	田口	武一	202
甜菜と煙洲先生	.....	応化昭八年	小西	博俊	204
煙洲会五〇〇回を記念して	.....	造船昭八年	斉木	雅夫	206
幼少の煙洲先生	.....	応化昭十年	鈴木	洋二	239
忘れ得ぬお言葉と私―五つの逢（おい）の坂―	.....	機械昭十年	荒井	文治	242
煙洲先生退任式の思ひ出	.....	機械昭十年	杉井	忠義	256
昭和一〇年卒業生は	.....	機械昭十年	犬塚	勝	259

名教自然と自由主義……………	機械昭十年	池本 時三……………	262
煙洲会五〇〇回記念に当り……………	応化昭十年	遠藤 博道……………	272
煙洲先生を偲んで……………	機械昭十年	黒川 信正……………	275
煙洲先生のお教え……………	応化昭十一年	落合 英一……………	279
終戦直後横浜工業会の役員として……………	電化昭十一年	鶴岡 武……………	282
煙洲会について……………	機械昭十一年	小汀浩一郎……………	285
煙洲先生を思うにつけ……………	機械昭十一年	大星 重雄……………	287
煙洲先生追憶の断片―衝天氣有・付自然―……………	応化昭十二年	林 辰治……………	294
同志社の人々……………	応化昭十四年	丸井 大陸……………	297
煙洲会に想う……………	電化昭十六年十二月	丸岡 勝美……………	301
煙洲先生と私……………	機械昭十七年九月	伊藤 良彦……………	303
続いてほしい煙洲会……………	電化昭三十年	尾上 秀夫……………	309
煙洲会記録……………			315
煙洲会幹事として……………	電化昭十七年九月	村松 四郎……………	341